44 巨大コレステリン肉芽腫の1例

宗像 良二・菊池 泰裕・渡辺善一郎
井上 秀之・伊崎 堅志・後藤 博美
伊藤 康信・小泉 仁一・後藤 恒夫
古和田正悦・渡邉 一夫
財団法人脳神経疾患研究所附属
総合南東北病院

【目的】耳鼻科領域では中耳に発生するコレステリン肉芽腫はよく知られている．今回，我々は錐体骨から伸展したと思われる，まれな頭蓋内コレステリン肉芽腫の一例を経験したので報告する．

症例は45歳の女性．5年前から軽度の頭痛と右の聴力低下を自覚していた．CTで右錐体骨を破壊し中頭蓋窩から後頭蓋窩に及ぶ約6cmのcystic mass lesionを認めた．MRIではcyst内容はT1強調画像，T2強調画像ともに高信号を示し，cyst wallはガドリニウムで増強された．開頭摘出術を行ったところcyst wallは硬膜と強く癒着しており，側頭骨と錐体骨の一部を圧迫し破壊していた．cyst内容液は茶褐色で漿液性の液体であった．病理所見ではcyst wallは多数のコレステリン結晶を含むfibrous tissueでありコレステリン肉芽腫の診断であった．

【考察】コレステリン肉芽腫は，種々の原因で発生したコレステリン結晶に対して組織反応が働き，その結果生じた肉芽が出血を繰り返して大きくなると考えられている．その好発部位は主に中耳腔であるが，錐体骨に発生し頭蓋内に進展することはまれである．

【結論】錐体骨に発生した巨大なコレステリン肉芽腫の1例を外科的に治療したので，若干の文献的考察を加えて報告する．

45 中脳に発生したgranular cell tumorの1症例

宇都宮昭裕・上之原広司・鈴木 晋介
西村 真実・沼上 佳寛・西野 晶子
鈴木 博義*・櫻井 芳明
国立仙台病院脳神経外科
同 臨床検査科病理部*

症例は18歳男性．既往歴特記なし．約1ヶ月の経過で複視，右上下肢脱力と右半身のしびれを自覚し他院を受診した．頭部MRIにて脳幹部に嚢胞性腫瘍を発見され当科へ紹介された．入院時神経学的には意識清明，左外転神経麻痺，右顔面神経麻痺，左半身しびれと左上下肢の筋力低下を認めた．MRIでは中脳の前部に小腫瘤があり，それに連続して中脳から橋上部右に拡大する嚢胞を確認できた．造影剤投与にて，中脳前部の小腫瘤は均一に造影された．脳血管造影では嚢胞による正常血管の圧迫像のみを示した．手術は，SEP，MEPとABR等のモニター下に行い，occipital-transtentorial approachにて腫瘍に到達した．嚢胞内腔を通し腫小瘤を部分摘出した．腫瘤は動眼神経に接触していた．嚢胞の開窓も十分に行った．術後，上記の神経症状は改善したが，新たに右動眼神経麻痺が出現した．組織学的に腫瘍は，大型類円形で内部に多数の微細な好酸性の顆粒を有する細胞質をもつ細胞が充実性に増殖していた．免疫染色では，S-100，tubulin，CD56が強陽性で，GFAP，chromogranin A，synaptophysin，CD68は陰性であった．以上から，脳幹に発生したgranular cell tumorと診断した．脳幹に発生した本腫瘍は稀であり，その発生や治療について文献的に考察を加えた．

46 小児眼窩内腫瘍の1例

鈴木 一郎・上之原広司・鈴木 博義*
宇都宮昭裕・鈴木 晋介・西野 晶子
西村 真実・沼上 佳寛・櫻井 芳明
国立仙台病院脳神経外科
同 臨床検査科*

症例は6歳男児．平成13年春頃からの徐々に

進行する左眼の下方偏移で発症，当院眼科受診しCTで左眼窩内に腫瘍性病変が認められたため当科紹介，平成15年8月28日，入院となった．左眼下方偏位，左眼上転障害による複視の症状が認められた．MRIでは，左眼窩上外側，筋円錐外に，T1WIで等信号，T2WIで不均一な低～高信号を呈し，Gd造影にてほぼ均一に増強される，長径約25mmの比較的境界明瞭な腫瘤が認められた．また，左眼球，左上直筋，左上眼瞼挙筋の尾側への圧排，眼窩上壁の骨皮質のerosionの所見が認められた．血管撮影では，腫瘍栄養血管ははっきりと同定できなかったが，わずかな腫瘍陰影像が認められた．9月16日，経頭蓋到達法（左前頭開頭）による摘出術施行，腫瘍は，弾性硬で，境界は明瞭，眼窩骨膜外から眼窩骨膜内に連続し，筋円錐外に存在しており，可及的に全摘出を行った．術後，左眼下方偏位，左眼上転障害，複視は消失，新しい神経脱落症状の出現なく自宅退院となった．病理所見は，間質に膠原繊維の沈着を伴う，異型の目立たないN/C比の低い小型の線維芽細胞の充実性増殖が主体の組織像で，solitary fibrous tumorが考えられたが，その場合陽性となるCD34免疫染色は陰性，一方，一部の細胞には平滑筋アクチンが陽性の所見が認められ，腫瘍細胞がmyofibroblastの性格を有することが示唆され，筋線維性腫瘍の可能性が考えられた．以上の症例について文献的考察を加えて報告する．

47　前頭洞から発生し，前頭骨に浸潤した悪性リンパ腫の1例

津田　宏重・竹林　誠治・石崎　賢一
宮野　　真・中井　啓文・程塚　　明
橋詰　清隆・田中　達也・高野　勝信*
旭川医科大学脳神経外科
ふらの西病院脳神経外科*

【はじめに】前頭洞より発生する悪性リンパ腫はまれな疾患で鼻粘膜から発生する悪性リンパ腫の中でも1～2％と報告されている．今回前頭洞から発生し，篩骨，前頭骨に浸潤した1症例を報告する．

症例は78才女性．進行する前額部の腫瘤を主訴に近医を受診．頭部CT，MRIで頭蓋骨腫瘍を疑い当院に治療目的で紹介．頭部CTで等吸収域の造影されない腫瘤性病変を前頭骨，前頭洞，篩骨洞に認めた．前頭洞，篩骨洞，前頭骨は骨融解を伴い，前額部の皮下にまで突出していた．MRIではT1，T2ともに等信号域で造影されなかった．硬膜内には浸潤は認めなかった．骨腫瘍，転移性骨腫瘍を疑い両側前頭開頭にて手術を施行した．腫瘍は弾性硬で皮膚からの栄養血管に富んでいた．腫瘍は前頭洞，篩骨洞まで及んでおり，同部の粘膜ごと腫瘍を摘出した．病理所見で悪性リンパ腫の診断となり，術後放射線治療を施行した．

【結論】前頭洞より発生し，頭蓋骨まで浸潤した悪性リンパ腫の一例を若干の文献考察を加え報告する．

48　ProMACE－MOPP Hybrid新潟大学変法による脳原発悪性リンパ腫（PCNSL）の治療成績

山中　龍也・森井　　研・高橋　英明
恩田　　清・田中　隆一
新潟大学脳研究所脳神経外科

【目的】ProMACE－MOPP変法によるPCNSLの治療成績と治療関連合併症につき検討した．

【症例と方法】1996年から32例のPCNSLがこのregimenで治療された．年齢は34～73，平均61.3歳．平均KPSは71.5．pirarubicin 25 mg/m^2，CPA 650 mg/m^2，VP－16 120 mg/m^2，VCR 1.4 mg/m^2，PCZ 100 mg/m^2，methotrexate（MTX）500 mg/m^{2}を3週間で1サイクル行い，3サイクル後に20Gyの全脳照射を行い，その後3か月毎2年間計7サイクルの化学療法を行つた．副作用はNCI－CTCで評価した．晩期神経障害は発症後2年後の画像grading scaleと神経心理学テストで評価した．

【結果】1）全体の5年生存率は56％，5年無病生存率は31％，平均生存 期間は68ケ月であつた．2）治療関連の急性期副作用としてGrade3/4の白血球減少を33％に認めたが，G－CSF投与で